

氏 名 (本 籍)	上 川 克 枝 (香川県)
学 位 の 種 類	博士 (学術)
学 位 記 番 号	博課第492号
学位授与年月日	平成23年 9 月30日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	地域社会の疲弊と活性のダイナミズム — 豊島を事例に —
論文審査委員	(委員長) 教授 中 島 道 男 教授 栗 岡 幹 英 准教授 水垣 源太郎 准教授 帯 谷 博 明 教授 内 田 忠 賢

論文内容の要旨

本論文は、瀬戸内海の離島である豊島をフィールドにして、地域社会の疲弊と活性のダイナミズムをとらえようとしたものである。豊島は、戦後急速に進んだ経済・社会の発展やグローバル化によって、多くの周縁地域と同様、過疎、少子高齢化、地場産業の衰退といった社会的諸課題に直面した。くわえて、産業廃棄物問題をめぐって、香川県と25年間の長きにわたって紛争状態になり、その間に地域社会はさらに疲弊を深めていった。

本論文が中心的に取り上げる事例は、この豊島産廃問題である。この問題にたいして、本論文は、住民がこだわる義理の関係性や世間体意識との関連という観点から分析している。義理や世間体の意識が、産廃問題に対峙する住民運動の発生・発展・衰退・活性化といった局面といかに関連しているか、さらには、住民運動が一定の成果をあげ地域紛争が一応の解決を見た時期の地域社会においていかなる役割を果たしているのか。本論文が考え抜こうとしているのは、ひとことで言えば、義理や世間体の意識が地域社会の人々の、日常および非日常の営みにいかなる機能を果たしているかについてである。

では、義理や世間体の意識をいかに取り出すのか。著者は、豊島に見られる病気お見舞い行動に注目する。病気お見舞い行動についての調査をとおして、住民がこだわる義理の関係性や世間体意識を探ろうとするのが、第Ⅰ部である。

第1章では、豊島の社会史が語られる。戦前は、自給自足の豊かな社会であった豊島であるが、戦後は疲弊を深めていった。そして、現在、産業廃棄物問題の解決の目途がたち、人々は改めて地域社会に目を向けはじめている。このことを、豊島に貼られた「豊かな島」「福祉の島」「産廃の島」という三つのラベルの変遷を通して分析している。

第2章は、住民が日々交わす病気お見舞い行動によって顕在化する義理の関係性に注目し、地域社会に張り巡らされた絆のありかを明らかにしようとする。病気お見舞い行動の調査にもとづき、住民が、離島での暮らしのリスクを抱えながら日々の関わり合いのなかで病気お見舞いを交わし、互いの関係性を確認しあい絆を強化していることが指摘され、住民が義理を媒介として広く絆を張り巡らせ、共同体の維持と住民結束の手段としていることが論じられている。義理への住民のこだわりに着目したのは、それが産業廃棄物をめぐる住民運動の展開のカギともなるからである。

第3章は、暮らしのなかに埋もれている、世間体というもう一つの絆を論じている。本章で注目されているのは、豊島の暮らしには、世間から逸脱しないように自身の行動を調整しようとする世間体意識が埋め込まれているという点である。住民たちがこだわる、この、世間体を維持しようとする意識に注目したのは、産廃闘争で傷ついた自らの世間体の回復と「産廃の島」とラベリングされた豊島の世間体の回復こそが、住民運動活性化の契機ともなっているからである。

第Ⅱ部は、病気お見舞い行動をとおしてみえてきた地域の絆が、非日常の活動である住民運動においても一定の機能を果たしているというアイデアのもと分析がなされている。香川県と豊島住民との間の紛争解決過程でどのような交渉がなされたのかを分析するにあたって、義理と世間体の意識との関連に注意が払われるのである。そして、義理と世間体の意識は、住民運動にとってプラスにもマイナスにも働いたという議論がなされる。第Ⅱ部は2章から成る。

第1章では、日本最大の産業廃棄物不法投棄事件である「豊島事件」が公害等調停成立に至った経緯を住民運動の流れに沿って検証している。この一連の流れは3段階でとらえられており、産廃持ち込みを阻止しようとした住民運動の生成と挫折を第一ステージ、阻止に失敗しながらも県に対して約束の履行を申し立てた第二ステージ、公害調停申請後の戦略的住民運動を第三ステージとしている。第2章は、「豊島事件」解決の過程で見えてくる各アクターの力関係に注目して、紛争解決への過程を明らかにしている。

これらの章では、それぞれのステージで、住民運動に義理や世間体がいかに関わっているかが強調される。住民運動への結束の最初の契機となったのは、産廃認可に反対する豊島の人々を説得にきた知事の「豊島の人のこころは灰色か」という発言によって豊島の人々がこだわる世間体が傷ついたこと、住民運動の挫折・停滞要因のひとつとして、紛争の相手である香川県を「親」「殿様」とみなす住民の義理の意識が存在していたこと、紛争解決の手段を外部に求めることを躊躇させたのも、弱みを見せないとする住民の世間体へのこだわりであったこと、再度住民運動を活性化させた、先人から

引き継いだ島を子孫へ継承することを自分たちの責務ととらえる住民たちの意識も、やはり義理という観点からとらえられること、などが論じられる。また、外部の専門的支援者としての弁護士たちと住民の関係にも注目し、自立した人権意識を求める弁護士らと住民がこだわる義理や世間体意識との葛藤についても論じている。

第Ⅲ部では、豊島において現在おこなわれている、ある企業のCSR活動の事例に注目しながら、ポスト住民運動期の豊島の現在と今後を考えようとしている。著者が注目するのは、CSRの一環としてやって来たボランティア参加者と地元住民との橋渡しをするUターン者の出現、あるいは外部からやって来た企業ボランティアの人たちと協働する地元の人々のなかから、これまでの血縁・地縁にもとづいたものとは違う集団が生まれてきているといった点である。著者は、これらを、義理や世間体の意識をいかに紡ぎなおすかという問題として議論している。義理や世間体といった従前の絆をベースにして新たに緩やかな絆が派生してきていることを指摘しようとしているのである。これまで、社会規範を、世間を同じくする他者との関係性に求めてきた住民が、世間を同じくしない島外のボランティアらとの協働を契機として、新たに緩やかな絆で繋がる集団をつくり始めたことが論じられている。

論文全体のまとめである終章では論文の総括がなされ、全国的に有名になった産廃問題をめぐる住民運動について、その発生から終息後までを、一貫して義理の関係性や世間体意識をベースにしてとらえることの意義が強調されるとともに、これまでの議論を受けて、自立にむかっの提言がなされている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、瀬戸内海の離島である香川県豊島での長年のフィールドワークをもとにして、地域社会の疲弊と活性化のダイナミズムをとらえようとしたものである。

本論文が中心的に取り上げる事例は、産業廃棄物問題をめぐって、香川県と25年間の長きにわたって紛争状態になった豊島産廃問題である。産廃問題で有名になってしまった豊島は、環境社会学の分野にとっては重要な島であり、研究の蓄積も多い。この問題にたいして、本論文は、住民がこだわる義理の関係性や世間体意識との関連という観点から切り込もうとしている。ここに、本論文の特徴がある。義理や世間体の意識が、産廃問題に対峙する住民運動の発生・発展・衰退・活性化といった局面といかに関連しているか、さらには、住民運動が一定の成果をあげ地域紛争が一応の解決を見た時期の地域社会においていかなる役割を果たしているのか。本論文が考え抜こうとしているのは、ひとことと言えば、義理や世間体の意識が地域社会の人々の、日常および非日常の営みにいかなる機能を果たしているかについてである。

著者は、了解された見学者でもなく外部支援者でもなく、高齢な義父母の代理＝嫁役割という微妙な立場で、豊島の地域社会に入り込むことになった。この経験を活かしながら、よそ者のまなざしを向けつつも、地域社会の一員として生活していくなかで紡いだ一連の考察は、いくつかの点で改善・洗練させるべきところはあるながらも、貴重な参与観察となっている。

第Ⅰ部は、地域社会の絆について論じられている。戦前戦後の豊島の地域社会がたどった変容を分析した第1章において、豊島は離島であることから生活上さまざまなリスクを背負っており、この離島という生活環境にあっては、病気になることは個人の問題であることに加えて住民相互の社会的関係性を顕在化させるものでもあることを指摘したのち、第2章と第3章では、病気お見舞い行動の分析をとおして、地域社会に張り巡らされた絆としての義理の関係性および世間体意識が取り出されている。ここでの分析は、豊島と奈良市での、既婚女性各13名を対象者にした、6ヶ月間の日々のもののやりとりの記録がベースとなっている。義理や世間体といった、なかなか扱いが難しいテーマに理論的な面でも果敢に挑戦するとともに、実証的な調査を踏まえて都市部との比較によって離島の特徴を論じようとした点は高く評価できよう。

第Ⅱ部は、豊島の産業廃棄物処理場をめぐって起きた社会紛争が事例とされている。第1章では、豊島住民運動の発展の過程を3段階で整理したのち、この産廃運動をめぐって、住民運動の生成から挫折、長い停滞期間を経て再度活性化し問題解決に至ったその過程において、豊島の人々がこだわる義理や世間体を意識する行動規範が重要な要因であることが論じられている。第2章では、豊島事件

の解決にまで至る過程において各アクターがいかなる役割を演じたのかを、各アクター間の力関係に注目して論じている。

この二つの章では、それぞれのステージで、住民運動に義理や世間体がいかに関わっているかが強調される。住民運動への結束の最初の契機となったのは、産廃認可に反対する豊島の人々を説得に来た知事の「豊島の人のところは灰色か」という発言によって、豊島の人々がこだわる世間体が傷ついたことにあること、住民運動の挫折・停滞要因のひとつとして、紛争の相手である香川県を「親」「殿様」とみなす住民の義理の意識が存在していたこと、紛争解決の手段を外部に求めることを躊躇させたのも、弱みを見せないとする住民の世間体へのこだわりであったこと、再度住民運動を活性化させた、先人から引き継いだ島を子孫へ継承することを自分たちの責務ととらえる住民たちの意識も、やはり義理と関係していることなど、興味深い論点が指摘されている。また、外部の専門的支援者としての弁護士たちと住民の関係についても注目し、自立した人権意識を求める弁護士らと住民がこだわる義理や世間体意識との葛藤についても論じている。

以上のように、第Ⅱ部では、義理と世間体の意識は住民運動にとってプラスにもマイナスにも働いたという議論がなされている。第Ⅰ部での議論をうけて、住民運動の盛衰を義理と世間体に引きつけて展開した議論は、斬新で刺激的である。ただ、義理や世間体を論ずるあまり、豊島の地域社会が一枚岩として描かれているという印象を受けるのは否めない。もちろん、著者とて、男性／女性の違い、世代別の認識の違いなどについて論じてはいるが、この側面をもう少し掘り下げる余地はあったかもしれない。

第Ⅲ部は、産廃問題が一定の解決をみた、いわゆるポスト住民運動期の地域社会の活性化について論じている。その際、ある企業のCSR活動の事例を素材としつつ、CSRの一環としてやって来たボランティア参加者と地元住民との橋渡しをするUターン者の出現、あるいは外部からやって来た企業ボランティアの人たちと協働する地元の人々のなかから、これまでの血縁・地縁にもとづいたものとは違う集団が生まれてきているといった点に注目している。

著者は、これらを、義理や世間体の意識をいかに紡ぎなおすかという問題として議論する。義理や世間体といった従前の絆をベースにして新たに緩やかな絆が派生してきていることを指摘し、内発的發展論を踏まえながら、伝統的地域社会のなかに生まれてきた新たな動きを暖かく見守りながら冷静に分析しようとしているのである。

本論文は、以上のように、豊島産廃問題をめぐる住民運動について、その発生から終息後までを、一貫して義理の関係性や世間体意識をベースにして論じたものである。この二つが人々をつなぐ絆として豊島の地域社会に内在していることを確認したうえで、地域紛争と地域活性化のダイナミックな変動を、フィールドワークをもとにして骨太に描いた意欲作として評価できる。

なお、本論文は、査読付きの学術誌（『奈良女子大学 社会学論集』）に掲載された3本の既発表論

文をもとにしたものであり、社会生活環境学専攻社会・地域学講座の社会学分野の学位取得基準を十分に満たしている。

よって、本学位論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるのに十分な内容を有していると判断した。